理解することは助け合うこと

益田市立東陽中学校　三年　　下森陸人

　僕は生まれつき脳性マヒという病気だったため、足がうまく動かせませんでした。

　そして保育園でもお店などでも、人に避けられているのではないかと、何となく感じていました。僕はその頃、自分が嫌いでした。よく自分の足を叩いては、自分を責めて泣いていました。

　その頃は車いすを使って生活していたので、買い物をするときも周りの人の邪魔になると思って、あまり行きませんでした。

　五歳になった頃、保育園で一人の男の子が話しかけてきてくれました。その子は僕が障がい者であるとわかっていても、普通の人のように接してくれました。その頃からよく遊ぶようになって、僕は自分を責めることが減りました。

　小学生になったとき、知らない子がたくさんいて、「あー、また何か言われるのかな。」と思いながら生活していました。そして予想は的中し、僕はいじめの対象となりました。その男の子だけは僕の味方をしてくれましたが、いじめは収まりませんでした。

　小学三年生になった頃、僕は勇気を出して、先生に今まであったことを話しました。そしてその頃から、障がいというものや、障がい者について理解を深める授業が始まり、いじめもなくなりました。それどころか、三年の後半に足の手術をすることが決まって悲しい気持ちになっていた時、クラス全員の手紙が貼ってある大きな寄せ書きをもらいました。「手術がんばってね」とか「早くよくなってね」などと書かれた手紙を読んで、僕はとても驚いて、感動してしまいました。

　その手紙に勇気づけられて手術したおかげで、僕は走れるようになり、それまでは車いすで参加していた運動会に、自分の足で参加できるようになりました。

　初めて参加した運動会は、僕だけ走る距離を短くするなど、いろいろなハンデがつけられていました。バトンを渡されて走り始めても、ワクワクする時間はあっという間に終わりました。僕がみんなと同じ距離を走ったらみんなに迷惑がかかり、自分の組が負けてしまうと思ったので、正直、みんなと同じように走りたかったけれど、「みんなと同じ距離を走りたい」とは言い出せませんでした。

　そんな気持ちは隠したまま二年が過ぎ、小学六年生の運動会のとき、ついにみんなと同じ距離を走ることになりました。担任の先生が、

「小学校最後の運動会、みんなと同じ距離を走ってみたくないか？」と、誰にも言わなかった僕の気持ちを言い当てられ、なぜわかったのか不思議でたまりませんでしたが、その時はすごくうれしかったです。

　実際にみんなと同じ長い距離を走り始めて何よりも驚いたのは、抜かれても、どれだけ差が開いても、みんなが応援してくれたことでした。中には、心ないことを言っていた人もいたけど、そんなこと気にもならないくらい、全力で走ることがうれしかったのです。

これをきっかけに、僕は普通に人と接することができるようになりました。それまでは、仲の良い人としか話さない、話しかけられたら返事だけはする、という僕だったけど、誰とでも話せるようになったのです。

僕が今のように普通に話したり、運動したりできるようになったのは、自分のことをみんなが理解してくれたからだと、僕は思っています。一人一人を大切にするには、お互いを深く知ることが大切だと思います。性格や持っている病気などを知ってもらい、どういう時に困るか、どのように接してくれると助かるかなど、いろいろなことを周りの人にわかってもらうことで、お互いを理解し合い、助け合うことができると僕は思います。自分から話すのは勇気がいることですが、僕は半年後には中学校を卒業し、新しい環境に入っていきます。自分のことを自分から話し、誰かが困っている時は、相手のことを聞き、理解して、助けになりたいです。